

子どもを取り巻く状況の変化について聞きました。

函館市学童保育連絡協議会（市連協）

川田 麻子 事務局長（写真・左）

川股 まち子 前事務局長（写真・右）



市連協は、市内の約半数の学童保育所が加盟している団体です。子どもたちの放課後の居場所を必要とする保護者等により1980年に設立されました。学童保育では、異年齢の子どもたちが一緒に過ごし、遊びの中でルールや思いやりを学びます。安全で安心して過ごしながら、豊かに成長してほしいという保護者の「願い」が詰まった場所です。

昔も今も、「遊びたい、仲間がほしい、楽しいことがしたい」という子どもの気持ちは変わりません。しかし、近年は、スマートフォンなどのデジタル機器に囲まれて、何かを創造して遊ぶ力は弱まっているかもしれません。公園でのボール遊びも禁

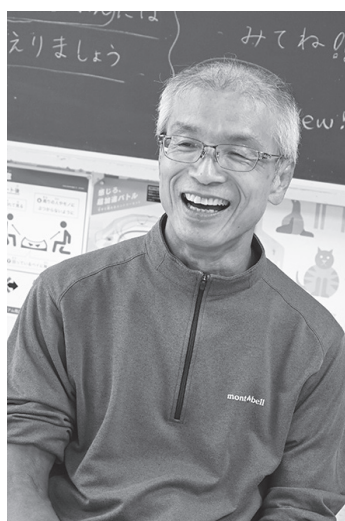
止されていたり、自由度が減っていて、昔のような“ドラえもん空き地”はなくなりました。

親の働き方も多様になり、子どもの過ごし方もさまざま、最近は親の都合だけでなく、子ども自身の意見を聞きながら、学童や習い事、友だちと遊ぶなどのさまざまな居場所を選ぶ家庭が増えています。また、繊細な感性を持つ子どもの存在に大人が気づくようになってきました。

放課後は子どもにとって自由な時間です。“自分らしくいい”場所が子どもには必要です。子どもたちの希望や保護者の生活・価値観などによって自由に選ぶことのできるような、多様な居場所が増えると良いですね。

深堀児童館

石川 嘉明 館長



市内の小学校の校長を定年退職した後に、深堀児童館で厚生員として勤務を始め、昨年からは館長を務めています。

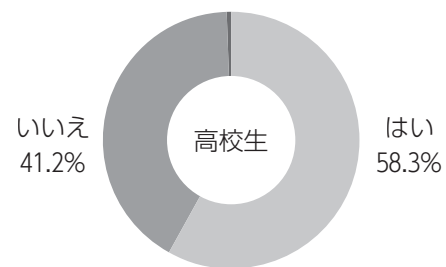
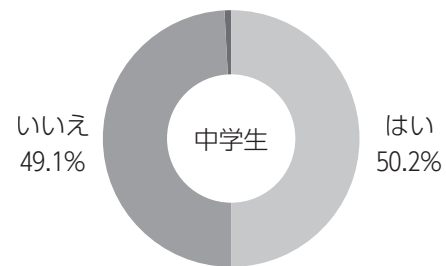
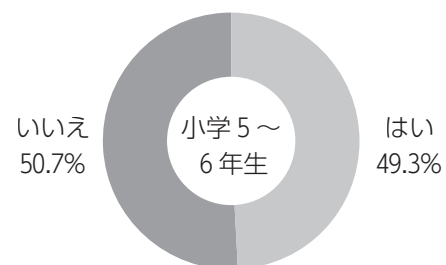
児童館での子どもの過ごし方は「遊び」が中心。学校と違って児童館は時間割がなく、マイペースに過ごせるのが特徴です。それでも帰宅時間など、一定のきまりに沿って運営しています。

今は子どもの安全への配慮から、子どもだけで過ごすことは避けられています。習い事をいくつも掛け持ちする子が増える一方で、共働きやひとり親も増えて家庭以外の居場所を必要とする子どもも多くなりました。

児童館はマイペースで自由な関わりの中で、異年齢の子どもや乳幼児と交流できる場所。一部児童館では、中高生のために開館時間の延長もしています。人とのつながりを通して、子どもたちの視野が広がればと思います。



家や学校以外の居場所がほしい？



（令和5年度子ども・子育て支援に関するニーズ調査より）

特集

子どもの居場所

子どもが自分の居場所を持つことは、生きていく力へとつながる自己肯定感や自己有用感を育むうえで不可欠であると言われています。その一方で、近年、少子化や核家族化、地域のつながりの希薄化などにより、子どもが地域コミュニティのなかでたくさんの大人と関わりながら健やかに育つことが難しい状況になってきています。

令和5年度に市が実施した調査では、家や学校以外に「ここに居たい」と感じる居場所について、「ほしい」と答えた子どもは全体で52.6%となりました。

身近な地域において、家や学校以外にも安心・安全に過ごすことができる居場所づくりを進めていくことは重要です。市では、児童館の設置や学童保育所を運営するとともに、小学校の余裕教室などを活用した放課後子ども教室を実施してきました。昨年度からは、子どもや若者と地域住民が交流できる施設を活用した小学生への学習支援や中高生の学習環境の確保などの子どもの居場所づくりを進めています。また、地域住民等による団体が主体となり、子どもの居場所づくりにつながる取り組みが各地域で行われています。

今回の特集では、多様化する「子どもの居場所」について取り上げます。



平澤 修さん (写真・左)



本谷 文子さん (写真・中)
松下 知春さん (写真・右)

いーとの家

水～日曜日
函館市大川町 8-20
☎76-7721



「ただいま」と帰ってくる場所に

いーとの家 は、小学生が自由に過ごせる無料のフリースペースで、個人・団体からの寄付によって運営しています。土日、夏冬休みは子ども食堂を開催しています。ここでのルールは「遊ぶ前に宿題をする」ことだけ。学ぶことは子どもたちの生きる力になりますし、何よりも家で親と過ごす時間を充実させてほしい。ここでは、宿題をして、おやつを食べて、おふるにも入れます。家庭の事情も様々ですが、少しでも親の負担が軽くなれば。

大切にしているのは、**子どもの意見を尊重し、よく話を聞き、決して否定しないこと**。子どもだけで話し合う「子ども会議」を開催して、やりたいことを決めます。子どもは、失敗をおそれます。大人からの評価を気にするからです。**大人が先回りし過ぎないことが大切です**。ここではスタッフも子どもにとって対等の友達です。大人が失敗する様子を見せることで子どもも安心します。親子の関係では難しくても、親以外の大人だからできることがあります。

子どもたちは「ただいま」と言ってこの場所に來ます。私たちも「おかえり」と迎えます。どんな子どもでも安心して過ごすことのできる、笑いの絶えない場所でありたいです。

多様化する子どもの居場所、大人にできること

みかん箱 のキャッチコピーは、「こどもがいくとこ、おとながいるとこ」。「**学び・出会い・感動を繰り返して、人生を豊かにする**」場所です。大人が楽しんでいなければ、子どもも楽しく過ごせない。子どもも大人も心地よく過ごせることが大切です。ここには、音楽が得意な人、ちょっと変わった大人など、さまざまな人がいます。そうした大人との出会いが、子どもたちの新しい挑戦のきっかけになれば。

今の子どもたちは、知識として「知っている」ことは多くても、実体験が少ない。ここでは五感を使って体験から学ぶことを大切にしています。ただ、そのような学びを提供するには大人の力量が必要で、うまくいかないことも多い。それでも、「**何かを伝えようと一所懸命に向き合う大人がいる**」ことは、**子どもに伝わります**。勉強が苦手でも、不登校でも、人生が終わったわけではない。まずは、ここで楽しいことを見つけ、将来を考えるきっかけをつかんでほしい。

ドラえもんに出てくる空き地をなくした大人たちは、それに変わる居場所を用意する責任があります。放課後の子どもたちの当たり前を取り戻すために、「子どもの居場所」がいろいろあるといいよね、という大人を増やしていきたい。

「子どもの居場所」の応援団を増やしたい

國嶋 莉々さん (写真・左)



福田 琢磨さん (写真・右)

みかん箱
探求塾 月、水曜日
ベースキャンプ 火～木曜日
所 函館市末広町 9-9
☎84-5762



まざる場

mazaruba

手作りで作ろう「本作り」

誰でも簡単！自分だけの特別な一冊。
大人と一緒に本を作りました。



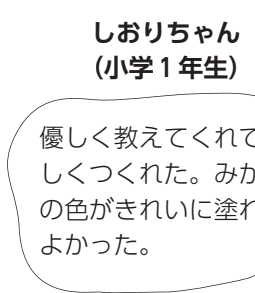
イベントの様子

美原にある複合商業施設「グランディールイチイ」に、今年の6月、子どもなら誰でも利用できる「まざる場」がオープン。イベントに参加したお子さんにお話を聞いてみました。



あかりちゃん (小学2年生)

最初は絵本をつくることのできるのか不安だったけれど、最後までつくることができた。上手につくれて、うれしかった。



しおりちゃん (小学1年生)

優しく教えてくれて楽しくつくれた。みかんの色がきれいに塗れてよかった。

Q. 学校から帰ったら何をしているの？

A. まず宿題をして、その後は公園で遊んだり、お母さんとテレビを見たりしています！

Q. 学校や家以外でどんなところで過ごしたい？

A. おもいきり走り回れるところ！「いちいの森」（まざる場の隣の屋内広場）が好き。ボールプールや登れる丘で遊びます。お父さんと一緒にする鬼ごっこも楽しい！

他にも、みんなでごはんを食べたり、遊んだり。

「まざる場」の詳細はこちら



まざる場コーディネーター 大室 果瑚 さん



まざる場では、月2回の「まざる食堂」や「まざるイベント」を通して、地域の子供から大人までが交流しています。平日は、大学生スタッフが中高生と関わる「まにまに」を週2回実施。静かに過ごしたい子も、話をしたい子も、スタッフが必ず声をかけ、安心できる雰囲気をつくっています。

ラジオ体操など地域行事にも参加し、SNSでは届かないつながりを広げています。まざる場は、自分らしくいられる居場所として、少しずつ地域に根づいてきています。

五稜郭のシエスタハコダテにある「Gスクエア」もそうですが、公共的な場所の中で人と人がつながる活動ができるのが良いところ。人と人がまざり合い、関わりの接点が自然に生まれる場所にしたいです。